「命生く」攷

――付、助詞「を」の表現価値――

上野辰義

一

現代日本語に移行する以前、古代から中世にかけての日本語には、「命生く」（生クは四段活用、後に上二段活用）という言い方があった。

後つひに妹は逢はむと朝露の命者生有恋は繁けど（いのちはいけり）
（万葉集巻十二・三〇四〇）[1]

死ぬる命生きもやすると心見に玉の緒ばかりあはむと言はなむ
（古今和歌集恋二・五六八）

其ノ箭忽ニ抽テ其ノ命則生キヌ
（三宝絵詞上巻）

今日我ガ命ノ生ヌル事ハ鹿ノ御徳也
（今昔物語集巻五ノ一八）

たとひ兼康命いきて、ふたたび平家の御方へ参りたりとも
（平家物語巻八妹尾最期）

辛き命生きたれど腰斬り損ぜられて
（徒然草八七段）

辛い inochi ばかり iqite 山へ入った
（天草版伊曽保物語）

この「命生く」は、「命死ぬ」の言い方と対をなし、

ぬば玉の甲斐の黒駒鞍着せば伊能致志難まし甲斐の黒駒
（雄略紀十三年九月）

命しなばいかゞはせむ
（竹取物語）

恋しさに死ぬる命をおもひいでて問ふ人あらばなしと答えよ
（大和物語一〇四段）

死ぬべき命なれど
（宇津保物語あて宮）

我ガ命ハ死ヌト云モ人ヲ殺ス事无シ
（今昔物語集巻三ノ十一）

我が命死なんをも露惜しまず
（宇治拾遺物語巻一二ノ一九）

その意味構造も、「命死ぬ」と同じく、「命」が「生く」の主語にあたると考えられるが、その一方で時代が下ると、

我レヲ助ケテ命ヲ生ケ給ヘ
（今昔物語集巻一七ノ一三）

やうやう辛い inochi ばかりを iqete 帰った。（天草版伊曽保物語）

の如く「命」を客語にとる他動詞下二段活用の「生く」と同様、自動詞であるのが一般の四段（又は上二段）活用の「生く」が、特に「命」が「を」を下接させている場合、他動詞的に「命」を客語としているかと見られる例も見え、

汝ハ、其ノ童ヲ質ニ取タルハ、我ガ命ヲ生カムト思フ故カ、亦、只童ヲ殺サムト思フカ、

（今昔物語集巻二五ノ一一）

この里の人々とく逃げのきて命生きよ。この山はたゞ今崩れて深き海になりなんとす。

（宇治拾遺物語巻二ノ一二）

現にこのような四段・上二段の「生く」を他動詞と解する説もあるが、このような客語―述語関係の「命生く」（生クは四段・又は上二段活用）の存在が認められるとなると「命生く」（以下、特にことわりない限り、この場合の「生く」は四段と上二段活用のものを指すこととする）における「命」と「生く」の格関係一般が不安定なものとなってきて、例えば時代的に溯る源氏物語桐壺巻にみえる、

限りとて別るる道の悲しきにいか（「生か」と「行か」の掛詞）まほしきは命なりけり

の歌における「生く」と「命」の基底的意味での格関係の把握も単純には行えなくなる。そこで以下小稿では、「命（を）生く」の格関係のありようを歴史的にあとづける中で、先に示した源氏物語の例などにおける「生く」の他動・自動の様相を検討し、「命（を）生く」ということばの意味的な揺れを考えてみたいと思う。

二

まず、万葉集にみえる五例の「命生く」の格関係（以下、形態面でなく、基底的意味面でこの語を用いる）とその表示法をみてみる。

恋ひ死なむ後は何せむ吾が命生日にこそ見まくほりすれ

（巻一一・二五九二）

いくばくも不二生有一命を恋ひつつそ我は息づく人に知らえず

（巻一二・二九〇五）

何時までに将生命そおほかたは恋ひつつあらずは死ぬるまされり

（巻一二・二九一三）

後つひに妹は逢はむと朝露の命者生有恋は繁けど

（巻一二・三〇四〇）

……末つひに君に逢はずは吾が命乃生極み恋ひつつも我は渡らむ

（巻一三・三二五〇）

これらの例は、二五九二番歌のように、形態面では連体修飾語と被修飾語の関係にあるものもあるが、そうした具体的な表現を成立させる前提としての基底的な意味構造においては、いずれも「命」が主語、「生く」が述語の関係にあると考えられる。

ところで、「命生く」に対応する形式である「命死ぬ」には、万葉集には見えないが、「命弑す」（古事記上巻歌謡）また「命」と同義語である「命」に関する「命を弑す」（崇神紀十年九月歌謡）という、「命」を客語とする他動的な言い方があるのに、「命生く」には、それに呼応するところの「命」（または「命」）を客語とする他動的な、例えば「命（を）生く」（生クは下二段活用）という言い方の確例は上代に見出せない。「生取」（万葉集巻十六・三八八五）「若活」我者」（神代紀下・第十段一書第四）などの表記や「いけ（池）」（ケは乙類）」の語の存在から、下二段活用の「生く」の存在は予想されるものの、なぜ「命（を）生く」（生クは下二段活用）の言い方の確例が見出せないのか、その理由は不明である。考えられる理由はそうした言い方

が当時存在したが、たまたま文献に記載されずにおわった、「命（を）生く」（生クは下二段活用）という意味構造自体が当時の日本語において存立しえなかった、などであるが、その判断はむずかしい。

ともあれ、にもかかわらず「命生く」（生クは四段、万葉集には「五十寸（いき）」〈二九〇四〉、「伊家（いけ）流」〈四〇八二・四一七〇〉の仮名書き例がある）の形は存存が確認され、その「命」と「生く」の格関係は主語―述語と認められる。

ただ、ここで注意しておくべきは、「生く」以外の用言を述語として「命・生く」と同様意味構造としてその主語と考えられる「命」が、客語を示す際に多用される助詞「を」を自らに下接させている例があることである（先の二九〇五番歌の「命を」にも「を」があるがこの「を」は「～なのに」の意と解せる接続助詞的なものとみられる）。A「命を長」B「命を長くほりす」C「命を長くありこそ」D「命を惜し（み）」E「命をほりしく」F「命を全し」G「命を（し）ま幸くもがも」H「命を過ぐ」I「命を幸く良し」などである。「生く」を述語とする「命を生く」の形は、万葉集にはみられないのだが、右の語例に「を」の用いられている理由を考えておくことは「命を生く」と表現されることが可能な意味的状況を推測しておくうえで重要と思われるので、そのことについて検討しておく。

まず、A「命を長」の例は次の一例である。

我が伊能知乎奈我と（＝長門）の島の小松原幾代を経てか神さび渡る　（巻一五・三六二一）

これは初句が「即興的な枕詞」（日本古典文学全集本頭注）として「長門」の「長」を導き出しているもので、この形をもつ枕詞の例はここ一例のみである。この「長」は「長かれと願う気持で」（同頭注）、「命」はこの主語と解されるが、そこで逆にこのように、「長し」に対して意味構造としてその主語にあたることばを「を」で呈示している他の語例をみてみると、

かくしつつあらくを良みぞたまきはる短き命乎長欲為流（いのちをながくほりする）　（巻六・九七五）

恋ひつつも後も逢はむと思へこそ己が命乎長欲為礼（いのちをながくほりすれ）　（巻一二・二八六八）

と、「ほりす」に続く場合（①、この場合万葉集における「長し」の意味上の主語はこの二例のごとく「命」につき、かつ「乎」を表記として明示している歌はこの二首のみである）、

うつせみの命乎長有社（いのちをながくありこそ）と留まれる我は斎（いは）ひて待たむ　（巻一三・三二九二）

と、「ありこそ」に続く場合（②、この場合も万葉集における「長し」の意味上の主語は「命」のみであり、その歌はこの一首のみである）、

秋夜乎長跡雖（あきのよをながしといへど）言積もりにし恋を尽くせば短かりけり　（巻一〇・二三〇三）

と、「と言へど」につづく場合（③）、

欲乎奈我美（＝夜を長み）眠の寝らえぬにあしひきの山彦とよめさ雄鹿鳴くも　（巻一五・三六八〇）

と、いわゆるミ語法の場合（④）とがある。④の場合においては、接尾語ミを伴う形容詞語幹の主語（ないし対象語）に顕在化する助詞と

しては「を」のみが出現しており、この「を」については後述。

③では、主語・述語の意味構造をもつ語を「と言ふ」が受けているのだが、その場合万葉集では、

大夫の去く跡云ふ道そ　（巻六・九七四）
妹はいます等人の云へば　（巻二・二一〇）
見すべき君が在り常不レ言に　（巻二・一六六）
我が念ふ妹毛有跡謂ばこそ　（巻一三・三二六三）

と主語述語（述語の品詞は、形容詞もあるが存在詞や動詞が目立つ）からなる文相等の句を受ける形式と、

我は尾花が末乎秋跡者将レ言　（巻一〇・二一一〇）
呵怜登君乎不レ言日は無し　（巻一二・三一九七）
深めし吾乎股海松のまた行き帰り妻等不レ言とかも　（巻一三・三三〇一）

のように、「体言Aを体言・形容動詞語幹Bと言ふ」の形式があるが、二三〇三番の歌は「秋の夜を」という後者の要素と終止形「長し」を「と言ふ」が受けるという前者の要素とを併せ持っている。これは、

天地は広し等伊倍ど　（巻五・八九二）

のごとく、「秋の夜は長しと言へど」とでもいうべきところを、「秋の夜長し」という意味的な主述関係を残したまま、「秋の夜」を動詞「言ふ」の客語として意識し、その関係を明示するために「を」が用いられているのだと解される。

②は文末に「こそ」がついて他者への希求を表わしているのだが、このように「主語＋補語＋アリコソ」の形をもつ他の例をみると、

梅が花散らず阿利許曽　（巻五・八四五）
我が思ふ我が子ま幸く有欲得　（巻九・一七九〇）
言の忌みも無く在乞と　（巻一三・三二八四）
言の故も無く有欲と　（巻一三・三二八八）

と、いずれも主語に「を」が下接していない。そこで②ではさらに……ありこそと（留まれる我は）斎ひて待たむ」とつづくので、「……と斎ふ」の形を検すると、

真幸而〇妹が伊波伴ば　（巻一五・三五八三）
平久〇我は伊波ゝむ　（巻二〇・四三九八）

と、「修飾語＋斎フ」の形では「と」が見られないが、「と」の用いられている場合は「と」が句的述語をうけ、かつ「斎ふ」もすべて三二九二と同じ「を斎ひ（て）待つ」の形になった例ばかりである。

君が目乎今日か明日か登伊波比弖麻多む　（巻一五・三五八七）
家人は帰りはや来等伊波比島伊波比麻都らむ旅行く我乎　（巻一五・三六三六）
秋風は日に異に吹きぬ我妹子は何時登か我乎伊波比麻都らむ　（巻一五・三六五九）
四つの舟はや帰り来等しらか付け朕が裳の裾に鎮而将レ待　（巻一九・四二六五）

これらは、最後の四二六五を除いて全て三二九二と同じく、「体言（多く『人』）〔a〕＋ヲ＋句的述語〔b〕＋ト斎ヒ（テ）待ツ」の構成をもっている。このaとbは、三二九二同様意味的には主語述語の構造をもっているのだが、この「を」は、

神乎|斎祀而（いはひて）　（巻七・一二三二）
斎瓮乎忌穿居（いはひへ　いはひほりすゑ）　（巻三・三七九、巻一三・三二八四）
旅行く君乎|伊波布と思ひて　（巻一九・四二六三）
旅行く人乎|伊波比島幾代経るまで伊波比来にけむ　（巻一五・三六三七）

とあるような、動詞「斎ふ」の客語を示す助詞とみられ、三二九二を含め、これらはａｂが基底的には主語述語の関係をもつが、直接的な意味表現としては、ａは述語「斎ひ待つ」の客語、ｂは「と」で受けられて同じく連用修飾語の関係にある。（ただ、この「を」は四二六五にみるごとくａｂ全体が「と」で受けられる場合には用いられない。）従って三二九二番の歌の場合も「命を」が「斎ひて待たむ」の客語、「長くありこそと」が、同じく修飾語にあたると解せる。

①の場合の九七五・二八六八において「長（く）」に下接する「ほりす」も、

汝（な）が目保里勢む　（巻一四・三三八三）
欲為物（ほりせしもの）は酒にしあるらし　（巻三・三四〇）

と、意味構造上客語をとる動詞だが、万葉集にみられる全十七例中、既に示した四例を除くと、残り十三例中十例は、「見まくほりす」の形をとる。これらの中には、

妹乎|欲見為礼　（巻三・五六〇）
秋乎|欲見世む　（巻八・一五一六）

と「を」で客語を示すものがあるが、

欲見吾為（みまくほりあがする）君も　（巻二・一六四）
欲見吾為（みまくほりあがする）里の　（巻七・一二〇五）

の例から推すと、「見まくほりす」の内的構造は「見まく＋ほりす」であるよりは「見まくほり＋す」であると意識されたらしく、五六〇・一五一六の客語「妹を」「秋を」も、「ほりす」のそれであるよりも（「ほりす」の客語は「見まく」である筈だ）、「見まくほりす」の「見（る）」に関わるものと解され、他の「ほりす」の場合より構造が入り組んでいる。他の残り三例は、

命ヲバ誰がためにかも長ク欲為（ほりせむ）　（巻一一・二四一六）
何せむに命ヲもとな永ク欲為（ほりせむ）　（巻一一・二三五八）
我が命は惜しくもあらずさにつらふ君によりてそ（命ヲ）長ク欲（ほり）為（せ）し　（巻一六・三八一三）

と九七五・二八六八に対応して同じ表現形式に訓めたり、また意味構造が同様に解せたりするものばかりで、九七五・二八六八における「命を」と比較しうる十分な例が存在しないが、「ほりす」は客語をとる語であるから、以前の②③の場合と同様に、「命を長くほりす」の場合も「命を」は「ほりす」の客語、「長く」は「ほりす」の修飾語と解せる。

このように、意味構造上、「を」を下接させている主語が「長し」を述語としている場合をみると、主語を「を」で呈示している④のミ語法の場合と、「長し」の基底的意味上の主語が「長し」よりも下に位置する動詞の表現上の客語として、「を」で示されている場合とがある。今、問題にしている三六二一の「我が命乎|長（門の島の）」の場合は、「（我が命）長かれと願う気持」の意と解されるが、そのような

意味を「命を長（し）」の形を含み有して表現する万葉集における形式は、①の「命を長くほりす」や②の「命を長くありこそと、斎ふ（あるいは「斎ひ（て）待つ」）」などの形式だけであったから、三六二一の場合も①か②の形式に準じてその文構造を理解し、「我が命を」は以下に想定される述語「ほりす」や「ありこそ」などの客語で、そこに用いられている「を」はその格を明示している助詞と解しておくのが、万葉集の同様の表現類型との比較では最も妥当と考えられる。ただ、あくまでも「我が命を」を表現上でも主語と見ようとするときは、「を」は④のミ語法のごとく主語を呈示した助詞と見ておくことになるだろう。

次に、B「命を長くほりす」、C「命を長くありこそ」だが、それらの具体例とそれらに「を」の用いられている事情は、今、Aを検討した際①②において見たごとくである。D「命を惜し（み）」の例も

うつせみの命乎惜美波に濡れ伊良虞の島の玉藻刈り食む　（巻一・二四）

とあるごとく、理由を表すいわゆるミ語法の主語を表す「を」であり、同じく④においてふれた（なお後述）。

また、E「命をほりしく」の場合は、該当例が、

たく縄の長き命乎欲苦は絶えずて人を見まくほりこそ　（巻四・七〇四）

のみであるが「ほりしく」は「欲り＋し（過去の助動詞キの連体形）＋ク語法」の構造であると解され、「欲る」が「欲りす」と同じくその欲する動作の客語をとるので、

妹が目乎欲　（巻一三・三二三七）

行　乎欲焉　（巻四・七三六）

などの例と同様「を」は「欲り（しく）」の客語である「命」に下接してその格を表示しているのだと解される。なお、この七三六の「行かまくを欲り」と先の一六四・一二〇五の「見まく欲り吾がする」との句構造を比較すると、「……まく＋欲り＋す」において、「……まく＋欲り」の結合の方が「欲り＋す」の結合より力が強いということになろう。あるいは万葉集中「行かまくほり」が一例のみ見られるのに対して（他の「ク語法＋欲ル」には「寝まくほり」〈巻一二・二八四四〉「聞かまくほり」〈巻一九・四二〇九〉が各一例ずつある）、「見まくほり」が一七例、加えて「見まくほりす」が既出例を含め計一〇例見られることからすると「見まくほり」が特に、複合語的に結合度が高かったのかもしれない。

F「命を全し」の例は、

伊能知乎之麻多久之安良婆あり衣のありて後にも逢はざらめやも　（巻一五・三七四一）

の一例である。この「全し」には、

わが命之将し全む限り　（巻四・五九五）

と「の」の下接した「命」を主語とする例も見られるのに、この三七四一で「を」の用いられている理由として形態面から検討すべき点は、「全くしあらば」と仮定表現になっている、「命をし全くしあらば」と「し」が重用されている、の二つである。今、「全し」の関わる仮定表現は他に例がないので、形容詞一般を述語とする仮定表現を

検するとその主語に「を」を用いているのは、

紫草の匂へる妹乎爾苦久有者人妻ゆゑに我恋ひめやも　（巻一・二一）

の一例が拾えるのみである。（この例における「妹」は、「憎し」の主語でなく、対象語と解する余地も厳密にはあるが、今は対象語も広く主語の中に含めてみておく。以下も同様。なお、この「憎し」にも仮定表現ではないが、「海の玉藻之憎者あらずて」〔巻七・一三九七〕、「よそふる君之悪有なくに」〔巻一一・二六五九〕と「の」「が」が下接して主語〈又は対象語〉を表示した例がある。）もちろん、「を」を主語の表示に用いていない仮定表現も存在するから、

草無者
古に梁打つ人乃無有世伐　（巻一・一一）
玉桙の道能等保家（＝遠け）婆　（巻三・三八七）
　（巻一七・三九六九）

仮定表現だからその句の主語に「を」がもちいられているわけではない。むしろ、「し」の方が条件法一般に多用されて条件法とは関わりが深いが（此島正年『国語助詞の研究』四〇八頁参照）、

我が背子之かく志聞こさば　（巻二〇・四四九九）
事之あらば　（巻四・五〇六）
千磐破神の社四無かりせば　（巻三・四〇四）

かといって、右の諸例のごとく、その場合「を」が必ず用いられるわけでもない。従って、三七四一の「を」は、この例において個別的事情によってもちいられたものだと考えられる。その事情とは「を」による主語の強調であろう（後述）。

「命生く」攷

またG「命を（し）ま幸くもがも」の例としては、

命乎志麻勢久可願名欲山岩踏み平しまたまたも来む　（巻九・一七七九）

の一例がある。この「もがも」は願望を表す「もが」と感動を表す「も」とが複合した形と考えられ、「もが」と同じく体言や連用語について、意味も「その体言の存在や連用語の示す状態の実現を希望期待する話し手の気持ちを表わす」（森田良行「な～そ・な（禁止）・ばや・なむ・な・ね・に・が・がな・もが（希望）」『解釈と鑑賞』昭和四五年一一月）とされる「もが」の場合とその差が明確でなく（浜田敦先生は「『もが』が希求表現となり得たのは」〈例えば〉「『玉にも。（あらぬ）か。』と云ふ形に還元し得るが為であつたと考へられる」〈「上代に於ける願望表現について」『国語と国文学』昭和二三年二月〉といっておられる）、現段階では「もが」と同様に解しておいても大きな問題を生じない。「もがも」は、

岩戸割る手力毛欲得　（巻三・四一九）
高々に我が思ふ妹を見むよし毛我母　（巻四・七五八）

と体言につく例が殆どで連用語につく例は、万葉集では、一七七九の他は次の三例のみである。

万代にかくし毛欲得と頼めりし　（巻三・四七八）
天橋も長（ク）雲鴨高山も高（ク）雲鴨　（巻一三・三二四五）
天地と共に母我毛と思ひつつありけむものを　（巻一五・三六九一）

この「……もがも」の形式で、上に位置する体言の存在や連用語の示

す状態の実現を希望期待するのは話し手（「と」で引用される場合は話題中の人物）であるが、三二四五のごとく「もがも」に上接する連用語が話し手以外に意味的な主語をもつ場合には、その主語（「天橋」「高山」）に対して「長く」又は「高く」あってほしいとあつらえ望む意が生じる。一七七九も同様である。佐伯梅友博士は「ほんとうに間投助詞らしい用法」の「を」を持った文節を受けるものは、

夜の夢に越継ぎて見えこそ　（巻五・八〇七）
よしこのころは恋ひつつ乎あらむ　（巻一一・二六〇三）
ほととぎすここに近く乎来鳴きてよ　（巻二〇・四四三八）

のごとく希求・意志・命令など「意志的な動作であることが注意される」（「間投助詞」『解釈と鑑賞』第二三巻第四号、昭和三三年四月）といわれた。しかし他者へのあつらえ（希求）として理解可能な、これらの三二四五・一七七九の例は今示した三例と文型も異なり、かつ「ほんとうに間投助詞らしい用法」の「を」も用いられていない。また「連用語＋もがも」の形であつらえられる（望まれる）対象である、三二四五の「天橋」「高山」にも「を（し）」は下接しておらず、「もが」による同形式の例においても、

あしひきの山はなく毛我　（巻一八・四〇七六）

と希求される対象である「山」に「を（し）」は下接していない。従って一七七九で「命」に「をし」という複合した助詞が下接しているのは、Fの場合と同様、この例においても個別的な事情に基づくもので、その事情は、「ま幸くもがも」とあつらえられる対象としての「命」を「をし」で強めるためだと思われる。

また、H「命を過ぐ」の例としては、

…節の間も惜しき命乎露霜の過ましにけれ（巻一九・四二一一）

が一例ある。巻五・八八六には、

…犬じもの道に伏してや伊能知周疑なむ

と「命」に「を」の下接していない例が見えるので四二一一の「を」も四二一一において個別的に用いられたものだと考えられる。（両例における「（に）けれ（バ）」「（な）む」という陳述の差は、ここでは「を」の採否に関わりはないとみてよいだろう。）ただ、ここでは「過ぎましにけれ」と敬語が用いられているので、「過ぎましにけれ」の主語を歌中の葦屋の菟原処女ととり、「命を」は「命なのに」と解して、「を」を接続助詞的に理解することも可能なのだが、

大王の御寿（みいのち）は長く天足有（あまたらしたり）　（巻二・一四七）

と、敬語を用いて待遇された「命」の例も見出せるので、「命を過ぐ」もここでは一応、小稿の対象に含めておく。

また、I「命を幸く良し」の例としては、巻七の一一四二番歌の初句第二句にあたる「命幸久吉」を「命を（し）幸く良けむと（石走る垂水の水をむすびて飲みつ）」と現在一般に訓んでいるものがあるが、その訓みには、「を」が補読である、初句の訓みが特に不安定である、かつては西本願寺本で「イノチサチヒサシキヨシモ」と訓まれていたなど、なお検討すべき問題が残っている。よってこのIの形式を、現段階では、小稿の対象から除外しておく。

以上、万葉集において「命生く」と同じく、主語（乃至対象語）である「命」に「を」の下接している言い方をみてみると、A・B・

Cの場合は、「命を」はすぐ下に位置する用言（ア）と基底的意味では主格―述語の関係を構成するが、表現された句の構造においては、その用言（ア）よりもさらに下に位置する用言（イ）を述語とする関係によって実は「命を」は主語でなく客語、用言（ア）は述語でなく修飾語であると解され（Eもこれに準ずる）、D・F・G・Hの場合は、句構造においても主語である「命」に「を」が下接しているものであると理解される。

こうして両者の「を」はかなりに異なる様相をみせるのだが、かといって、この両者の「を」の文法的な性格や意味の差は、これらが格助詞に分類されるべきなのか、それとも間投助詞に分類されるべきなのかという問題を含めて、単純には見定めがたい。というのは、古代語の個々の「を」の用例が持つ格助詞性・間投助詞性さらには小稿では直接関わらないが、接続助詞性の識別の困難さ、逆に言えばこれらの文法的機能の連続性・融合性の問題が存在するからである。例えばAの三六二一番歌の場合、「長門」の「長」を導く初句の枕詞「我が命を」の「を」は客語表示の機能即ち格助詞性をもつと解したが、「我が命を」と同じく「体言＋ヲ」の構成をもつ他の枕詞の中には、

御心乎吉野の国の　（巻一・三六）
春日乎かすがの山の　（巻三・三七二）
うま酒呼三輪の祝がいはふ杉　（巻四・七一二）
みはかし乎剣の池の　（巻一三・三二八九）
焼大刀乎礪波の関に　（巻一八・四〇八五）

など「を」が「御心を寄す（四段）」・「焼大刀を研ぐ」の意味関係で他動詞の客語を表示していると解せるものもあるが、同時にこの種の枕詞には、「を」を持たない「春日（春日）〔武烈前紀〕」「うま酒（三輪・三室）」、「を」の代わりに「の」をもつ「春日の（春日）〔継体紀七年〕」「うま酒の（三諸）」「焼大刀の（利心・へつかふ）」などの形が一方で存在し、これらの「を」をもつもの、「の」をもつもの、「を」も「の」ももたぬもの三者相互の機能的な差を識別しがたいのである。（「焼大刀の」は「利し」の意で「利心」にかかるとも説かれるが、その「利し」と「焼大刀を＝研ぐ＝」の場合の「研ぐ」とは語幹がともに「と（甲類）」で共通しており、枕詞の機能としては「焼大刀」が「利」にかかっているとも解せる《『時代別国語大辞典上代篇』「やきたち」の項、参照》。）三形式の機能的互換性を考えると、「体言＋ヲ」の構成をもつ枕詞の「を」が、どれも一様に客語表示の機能を荷っているとは断言しがたくなる。ことに「うま酒を」において明白な、客語表示とは直接関わらない強調詠嘆的な間投助詞的性格が、他の枕詞中の「を」にも指摘できるかもしれないのである。（枕詞の「を」の詠嘆性については、金子武雄『称詞・枕詞・序詞の研究』にも述べられている。）同様の可能性は三六二一の即興的な枕詞「我が命を」の「を」においても存在すると思われる。また、Dの「命を惜しみ」の場合も、一般に「体言＋ヲ＋形容詞の語幹＋ミ」の形をとるいわゆるミ語法において「藤波の花なつかしみ（花奈都可之美）」（巻一九・四一九二）のごとく「を」の入らない形も一方に存在しており、「を」が本来必ずしも必要でなく後から挿入されたものとみられるならば、「を」は述語である「形容詞語幹＋ミ」の主語を強調す

るために下接した間投助詞と理解することもできる（山口明「を」『日本文法大辞典』）。同様に、F・G・Hにおいても、

我が命全有めやも　（巻一二・二八九一）
我が命之将全む限り　（巻四・五九五）
我が命之真幸（ク）あらば　（巻三・二八八）
道に臥してや伊能知周疑なむ　（巻五・八八六）

と「命」の主語表示に「を」が用いられていない例の存在から、「を」を用いた場合の間投助詞的な強調性がうかがわれる。さらには、これは現代語にも通じる事象であるが、客語表示に「を」を用いない形式も一般的であったことを考えると、B・C・Eの客語表示に用いられた「を」さえも、その機能の質が疑われてくるのである。このような様相をみせる「を」について、時枝誠記博士はこれを「格を表はす助詞」とみとめながらも、「恐らく、『を』は、主語、客語、対象語を通じて、それが述語に対して、強く対立したものとして取出された時に用ゐられるもので、もし云ふならば、論理的格に対して、感情的格を表現するものとでも云ふべきである」（『日本文法文語篇』二〇九頁）といわれ、また酒井憲二氏は、「『が・に・と』など他の格助詞にかようとされる場合も、基本的には一種の感動表現であること、つまり特に心をこめて表現すべき語の直下に付した間投用法の本来の意義を考慮すべき」（「や・を・ゑ・よ」『解釈と鑑賞』昭和四五年一一月）であるといわれている。このように、古代語の、体言乃至準体言に下接した「を」には格表示の機能の範囲に収まらず、間投助詞的な強調や、小稿では直接関わらぬ句の接続に関与しているかとみられる場合が多い。

従って、本章で扱った、万葉集にみられる「命」に下接している「を」についても、構文的に主語表示に用いられているとみられる場合はもちろんのこと、客語表示に用いられているとみられる場合も、こうした強調詠嘆的な間投助詞的性格の存在する可能性に留意しておかなければいけない。

こうして、万葉集には、「命生く」の「生く」が他動詞的に用いられているかと疑われるような「命を生く」という言い方は見出せないし、実際、他の言い方を含めて「生く」が他動詞的に用いられてもいない。ただ、「命生く」についても、以上に見たごとき「命＋ヲ」を出現させていたところの諸事情が整備されれば、他動詞的であるか否かは別にして、「命を生く」という言い方も成立しえたかもしれないと推量する余地はある。あくまでも可能と推量する範囲でのことであるが、留意しておきたい。

三

万葉集においてみられる、「命生く」についての以上のごとき様相は、和語としての表記が確認できる記紀歌謡をはじめとする上代歌謡や、時代が下って中古の主要な仮名作品においても基本的に同様に認められる。「命生く」の幾つかの例は既に第一章に示したので、「命」に「を」の下接した例を少しくあげる。

我が君の命を乞ば　（皇太神宮年中行事）
死ぬ死ぬと聞くきくだにもあひ見ねば命をいつの世にか残さむ

命をもみづから捨てつべく　（後撰和歌集恋三・七〇九）

生きかへりにける命をうらめしく思しみだる　（源氏物語幻）

かく命をばたもたれて候へ　（夜の寝覚巻二）

ただ、これらにおける「を」はいずれも基本的には客語表示に用いられていると判断されるものばかりで、主語である「命」に下接しているかと疑う余地のある例は最後の大鏡のものぐらいだが、[2] 同様に疑うことのできる例は、今昔物語集以降の作品に、しかも「命を生く」の形で多く見出せるようになる。

命ヲ生ク事偏ニ方広大乗ノ力也ト知テ　（今昔物語集巻一四ノ三八）

希有の命をこそ生きたりければ、　（宇治拾遺物語巻二ノ一一）

成経とてもかひなき命をいきて何にかはし候べき。　（平家物語巻二・少将乞請）

辛い inochiuo iqite その難をのがれた。　（天草版伊曽保物語）

この「命を生く」という形については、桜井光昭氏が「命生く」を含め、他の「体言＋ヲ＋（通常の）自動詞」の形式における自動詞を「再帰的他動詞」と命名されて、その他動性を認められている。[3] 氏の見解は、通常多くの場合自動詞として用いられている語が、他動詞的に作用していると見られる場合の統一的な理解の仕方として魅力的なものではあるが、「体言＋ヲ＋（通常の）自動詞」の形が、全て他動詞的のものとも断言しがたいし、この場合のヲが全て客語表示の機能を持つと前提的に考えるのも注意を要する。前章で見たごとく、上代において「を」は、客語のみならず主語や対象語にも下接していたし、平安時代に入っても、主語につく「を」はその初期の点本に、

無レし際リを。　（山田本法華経古点）

菩薩は昔舊き疑をありき。　（石山寺本法華義疏長保点巻四）

と見出され、時枝博士のいわれる対象語にも、

「さりや。誰か、その使ひならひ給はむをばむつからん。うるさき戯れごと言ひかかりたまふを、わづらはしきに」など言ひあへり。　（源氏物語玉鬘）

とついたりしている。客語に下接した場合でも、広井玲子氏[4]や小山敦子氏の詳細な報告によれば、「『を』が附加されることによって一種の主情的な強調がなされる」[5]という。

従って今の場合、「命を生く」を含め、「体言＋ヲ＋（通常の）自動詞」の形における自動・他動の様相[6]を、その揺れはなぜ起こるのか、ヲはそれとどのように関わっているのかに留意してもう一度考えてみる必要がある。

そこで、この形の具体的な例を、ひとまず「命を生く」の言い方が見出せる今昔物語集成立頃までの範囲でみてみると、早く上代から該当する例として認められる動詞に「立つ（四段）」がある。万葉集には「鵜川（を）立つ」の例が、

婦負川の速き瀬ごとに篝（かがり）さし八十伴（やそとも）の緒は宇加波多知けり　（巻一七・四〇二三）

川の神も大御食（おほみけ）に仕へ奉ると上つ瀬に鵜川乎立下つ瀬に小網さし渡す　（巻一・三八）

と見られる。これらは「八十伴の緒・川の神ガ鵜川ヲ立つ」の構文と

解され、「立つ」を他動性のものと認めてよいものである。さらに中古に入ると、「名を立つ」と「腹を立つ」の例が見出せる。「名を立つ」の例。

をみなへし多かる野辺に宿りせばあやなくあだの名をやたちなむ
（古今和歌集秋上・二二九）

年を経て花のたよりに言問はばいとどあだなる名をやたちなん
（貞応二年本後撰和歌集春中・七八）

桜花見るに心のゆきぬれば春はいそぎしなをぞたちぬる
（好忠集）

下だれる際の好き者どもに名をたち、あざむかれて、
（源氏物語若菜上）

せめてながらへば、をのづからあるまじき名をもたち、我も人も安からぬ乱れ、いで来るやうもあらむよりは、（源氏物語柏木）

後見なき人なむ、中々、さるさまにてあるまじき名をたち、罪えがましき時、
（源氏物語夕霧）

松島の海人の濡れ衣なれぬとてぬぎかへつてふ名をたためやは
（源氏物語夕霧）

つれなしと見つつつれなく忍ぶるに我もつれなき名をぞたちぬる
（書陵部蔵相模集）

しかし、これらの「立つ」は、先の「鵜川（を）立つ」の場合とは異って、即他動詞と理解するのは文脈的にむずかしい。これらの諸例は多く古今集二二九番歌に基づいているのかもしれないが、「名」に「あだの」「あだなる」「あるまじき」などの修飾語（「ぬぎかへつてふ」も男を乗りかえるの意で、以上に準ずる）がついたり、また「立つ」に「好き者どもに」がかかったりして、浮き名に関係している例が多数を占め、他の例も「いそぎし名」「つれなき名」などとあって不名誉な評判に関わるものが多いからである。こうした「名」を当の本人が他動的に、少なくとも積極的に自分に関して「立てる」ことは一般には想定しがたい。

松下大三郎氏は、他動詞に意志的他動と自然的他動とを認めて、「財産をなくなした」「微に琴を聞く」など主体の意志を認めない作用を後者と称し、文語ではこの古今集の二二九番歌を例に引かれて、「名をやたちなむ」は、「人が故意に名を立てたのではなく名を立てられてその結果名を得たのである。名の方から云へば名が立つたのであるが人の方から云へば名を得たのであ」（「動詞の自他被使動の研究」『国学院雑誌』大正一二年一二月号）り、「他動の自然性を表すために、自動性と同じ活用を用ゐるものである。自動性動詞の他動化である」（『改撰標準日本文法』二六四頁）といわれている。

この松下氏の説は、「他動性動詞は『～を』に接続するという固定的定義を遵守する姿勢がうかがわれ、自然な言葉の理解ではない」（島田昌彦氏『国語における自動詞と他動詞』三七四頁）が、主体の意志にかかわらず名を立てられてその結果名を得たとする理解は有益のように思われる。つまり元来は「名ガ立つ」という自動的作用なのだが、そのことは名の立った当人を中心にして見れば、自己の意志にかかわらず名が立ったという自発相から、名を立てられた、結果的に自分が名を立てたという受身や他動的な意味構造にも転換することが可

能な事柄なのである。そして、その意味構造の転換に表現的なレベルで可能性を与えているのが、「を」なのだと思われる。「名を立つ」の「を」が全て客語表示だと言っているのではない。起源的には、「(あだの)名」の「立つ」という事態が、本人にとって非意志的な、この場合には好ましくないものであることと相関して、その結果的に生起する「名」を本人の立場から主情的に強調するために「を」が下接せられたのであるが、その主情的な強調ゆえに、自発的な意味合いのみならず名ヲ立テラレタ、名ヲ立テテシマウという自動性以外の言外の趣きもが生起し、また「を」が量的にも客語に下接して用いられることが多いために、本来主語である「名」が客語的に受けとられやすい状況もつくりだされて、一層その言外の趣きが誘発・強化されるようになった、と推量するのである。こうして、「名を立つ」の場合は、本来の自動性をいまだ強く保持しつつ、受身や他動的な意味合いを言外に有しているという段階にあると考えられるが、「腹を立つ」も、例は多く拾えないが次例では、直前に「いとゞことをつけて」とある関係で、つまり文脈的な展開によって、「鵜川(を)立つ」と同様に他動性が強く表出されているとみられる。

よしとほめし装束も、すぢかひ、あやしげにし出づれば、いとゞことをつけて、腹を立ちて、しかけたる衣どもも著ずて、

(落窪物語巻二)

つまり、「鵜川(を)立つ」のごとく、形態的に固定したり、落窪物語の「腹を立つ」のごとく、前後に「腹を立つ」当の本人の意志的な作用を表す語句がある場合には、言外の他動的な意味合いが、表現形式としても確立したり(この段階では「を」を特に必要としない)、顕在化するのだと思われる。

このような事情を、他の「体言+ヲ+(通常の)自動詞」の形式にも想定することで、それらのもつ無意志的自動(自発)・(受身)・当人による結果的他動の意味的な揺れの理由やありようも理解できるように思われる。

青柳の細き眉根乎咲麻我理朝影見つつ

(万葉集巻一九・四一九二)

花の色は雪にまじりて見えずとも(梅ノ花ヲ)香をだにほへ人の知るべく

(古今和歌集冬・三三五)

わびぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらば去なむとぞ思ふ

(古今和歌集雑下・九三八)

由良のとを渡る舟人楫を絶え行へもしらぬ恋の道かな

(好忠集・四一〇)

かしこ淵、いかなる底の心を見えて、さる名をつきけんとおかし容貌きたなげなく若やかなるほどの、をのがじしは塵もつかじと身をもてなし、

(能因本枕草子、淵は)

(源氏物語帚木)

——これは、大きな非難はもちろん、ほんの少しの悪評も、の意で「も」が使われているのであろう。

おほかたこの御族の、頭争ひに敵をつきたまへば、

(大鏡巻三・伊尹)

守、「(目代に)便ヲモ付カシ」ト思テ、

（今昔物語集巻二八ノ二七）

「命を生く」の形が見出せるようになる今昔物語集以降も、次のように他動性が強くうかがえる例も存在するが、

いかさま是は祇といふ文字を名について、かくはめでたきやらむ。いざ我等もついて見む。（平家物語巻一・祇王）

能をつかむとする人、「よくせざらむほどは、なまじゐに人にしられじ。……」と常にいふめれど、（徒然草・一五〇段）

一方では、無意志的自動性に基づく受身などの意味合いのうかがえる例も存在する。

（一行阿闍梨ハ）玄宗の后楊貴妃に名を立給へり。（平家物語巻二・一行阿闍梨之沙汰）

近比、無沙汰の智了房といふ者ありけり。……。無沙汰の名をつきけれども、以外に沙汰きゝてぞふるまひたりける。（古今著聞集巻一六―五五五）

ただ、ここで補足しておくべきことは、「体言＋ヲ＋（通常の）自動詞」の形式において、「鵜川・名・腹を立つ」の場合には用例が見出しにくかったのだが、「香をだにほへ」「便ヲモ付カシ」などの命令形や、「塵もつかじ」「我等も（文字ヲ）ついて見む」「能をつかむ」などの意志を表わす表現（「根をたえて……去なむ」もこれに近い）が付随すると、当人による他動性が強化され明瞭になるということと、この形式における、体言と自動詞の組み合わせには固定性や偶発性がうかがえ、一般的な自由な表現形式ではあまりなかったかと思われることである。

このような事情は、「命を生く」の場合にも基本的には同様で、

思ひかけぬ指貫のくゝりの徳に、希有の命をこそ生きたりければ、（宇治拾遺物語巻二ノ一一）

我レ偏ニ観音ノ助ケニ依テ、命ヲ生ヌル事ヲ泣ゝク喜テ（今昔物語集巻一六ノ二四）

などでは、他者の徳（お蔭）や助けに依る語句があるために、助ケラレル・救ワレル・自然ト生キノビタなどの意味合いがうかがわれるが、第一章に示した「我ガ命ヲ生カムト思フ」（今昔・二五ノ一一）などの意志の表示や、

いかにもしてかひなき命をいかばや、と思ひしも、（平家物語巻一二・泊瀬六代）

などの希望の表現や命令表現を伴う場合においては、自身デ命ヲ生カス・救ウ・助ケルなどの他動的な意味合いが強く表出される。

しかし注意すべきは、「を」の用いられていない「命（の）生く」でも、「命を生く」ほど明瞭ではないが、類似の様相が認められることである。

（鹿）この男をたすけてけり。男、命のいきぬることをよろこびて、手をすりて、鹿にむかひていはく、（宇治拾遺物語巻七ノ一）

誠に御恩をも（ッ）てしばしの命いき候はんずる事は、（平家物語巻二・少将乞請）

では、他者に依り助命されて、命の生きのびた事を意味しているし、第一章に示した「この里の人々、とく逃げのきて命生きよ」（宇治拾

遺・二ノ一二）や、

人目も恥ず、いかにもして命いかうど思（ッ）しも、これらをいま一度見ばやと思ふためなり。　（平家物語巻三・僧都死去）

では、自身デ命ヲ助ケル・生カス意味合いが強い。これは、「命を生く」の「を」が省略されたものであるからかとも疑われるが、一方でここに示した宇治拾遺物語（七ノ一）の例や、第一章に示した今昔物語集（五ノ一八）の「我ガ命ノ生ヌル事」、また、太平記（巻一・頼員回忠事）の「千ニ一モ命ノ生ンズル事」などの例のごとく、「命の生く」の形が存在し、それらの「の」は従属句の主語を示しているものであろうから、従属句という条件がなくなれば「命の生く」は当然「命生く」に還元されるものであり、「命生く」の「命」もやはりまずは主格であらねばならない。従って、いまだこの時期において「命生く」は、上代の「鵜川（を）立つ」のごとく他動性のものに、少なくとも完全に固定したとは考えられず、「命生く」が「命を生く」の「を」を省略したものとも考えられない。

では、なぜ、強調の「を」をもたない「命生く」が、「命を生く」と類似した無意志的な自動性や受身、当人による結果的な他動性の意味合いを帯びるのかというと、「命生く」自体が「生く」の強調的な意味合いを本来的に持っていたからだと思われる。「命生く」は第一章に示した万葉集以下の諸例をみてもうかがわれるごとく、元来は「命」の表わす生命乃至寿命を人間にとって不随意の独立の存在と観[8]て、「命死ぬ」と呼応しつつその維持・継続・消滅を表わしていたと考えられるが、それは同時に、単に「生く」という場合に較べてその生きうる根源である「命」の存在を顕在化させた言い方として、「生く」の強調的な意味合いも持ちえていたのである。

いくばくも生けらじ命を恋ひつつそ我は息づく人に知らえず　（万葉集巻一二・二九〇五）

いつまでに生かむ命そおほかたは恋ひつつあらずは死ぬるまされり　（同、巻一二・二九一三）

わが命の生けらむ極み恋ひつつも我は渡らむ　（同、巻一三・三二五〇）

生くよしもあらじ命をはかなくも頼みて年のへにけるか　（平中物語・三）

生きかへりにける命を、うらめしく思しみだる。　（夜の寝覚巻二）

しかも、自己の生の根源である「命」の存在が自覚されるのは、生命力が衰弱したり身に危険が迫ったり、また生きる意欲を失ったりして自己の生命の継続・維持が困難な状況に陥った時に多いのが普通だが、実際、「命」の語を顕現させた「命生く」の形式が使われている場をみると、そのような背景をもつ文脈であることがほとんどで、そうした場では当然、自己の「命」に対する当人の無意志的な処遇が環境や他者によってもたらされやすい状況なのだと言えよう。これが、「命生く」が「命を生く」と同様に、無意志的な自動性や受身、当人による結果的な「命」に対する他動性（意志・希望・命令表現のある場合は自覚的な他動性）の生起しうる基底なのだと考えられる。

「命を生く」はこのような「命生く」を、「を」を用いることでさら

に強調したものとみなされるから、「命生く」でもうかがえた無意志的自動性以下の諸相が、「命を生く」においてより明瞭になるのは当然と思われるが、さらに「命を生く」の形においては、以上のような意味合いの他に、「命」を天命・寿命の意味に解した際に、「を」に、「夜を寝む」「長道を恋ひ来」「宿を立ち出づ」などと言う時の、動作の行なわれる時や場所を示す機能も想起されて、自己の与えられた天寿を障害をのりこえて生き抜く、といった意味にも受けとれてしまい、個々の「命を生く」の例の意味を明確に定位するのは容易でない。

こうして、「命を生く」は、「命生く」の強調表現として、他の「体言＋ヲ＋（通常の）自動詞」一般の形式と同じように、当人の無意志的な自動性を基にした受身性や「命」に対する当人の結果的他動性、さらには意識的他動性への動きをうかがいみることができるものの、そのもとになる「命生く」自身が「生く」の強調表現的な性格を持っていることや、「命」自体の多義性の関連もあって、個々の具体例における意味のありようは、同類の表現形式に較べても一層複雑なものとなっている。

四

こうした「命生く」や「命を生く」、さらには「体言＋ヲ＋（通常の）自動詞」の形式一般の意味の様相を踏まえて、源氏物語桐壺巻の更衣の歌、

限りとて別るゝ道の悲しきにいかまほしきは命なりけり

に、眼を転じていく時、ここにおける「命生く」の意味構造の把握はどのように可能となるだろうか。

和歌において「命生く」がどのように詠まれているかをみると、源氏物語では和歌以外を含めてもこの例が唯一だが、中古では、第一章に示した古今和歌集五六八番歌や第三章で示した平中物語三段の長歌の例をはじめとして、

消えぬべき命も生やと心みむ玉の緒ばかりあはむといはなむ
（新撰万葉集・四七二）

偽りにたのめしによりいける命猶それもがな千世もへぬべき
（林葉和歌集・九二七）

なげきこそおほえの山とつもりぬれ命いく野のほどにつけても
（資賢集・一六）

とにかくにおもへどもののかなはねばいける命をなげくばかりぞ
（千五百番歌合・二六二六）

と、「命」は主体から独立した不随意の存在として扱われており、かつ「命」と「生く」の意味的関係は、主語―述語のそれと認められるものばかりである。また、「命生く」という形式としては認めえないが、一首中に「命」と「生く」を詠み込んでいる歌でも、

風吹けばとまらぬ露の命もていかむとおもふことのはかなさ
（伊勢集・二〇三）

何せむに命をかけて誓ひけむいかばやと思ふ折もありけり
（拾遺和歌集恋四・八七一・実方）

惜しからぬ命なれどももろともにいかまほしきはいきの松原

（弁乳母集・一〇七）

と、生に対する主体の意志とは独立した存在として「命」がとらえられているから、「命」についての観方や「命生く」の意味的構造は万葉集以来、基本的に一貫しているとみられる。

桐壺巻の更衣の歌の「命生く」も、同様に基本的には主語―述語の構造にあると解して問題ないが、上句の「限りとて別るゝ道」の関係で「いか」が「行か」との掛詞とされ、また上句が「……悲しきに」と接続句になっているために、「命」「生く」が「いかまほしきは命なりけり」と、「―は……なり」の形式の中に分離して置かれることとなった。そのうえ「生く」に「まほし」が下接しているので、現実の格関係が単純には把握しがたくなっている。

「まほし」は、言い切りの形で用いられる場合がそれに限られるように、本来は言語主体の希望を表現する形式であったのだろうが、[9]

（薫八）ただ今もはひ寄りて、世の中におはしけるものを、と言ひ慰めまほし。　（源氏物語宿木）

形容詞的な活用をする中で、対称・他称を希望の主体とする表現も可能となり、

（葵上ガ源氏ニ）聞えをかまほしき事もおはするにやとて、　（源氏物語葵）

用例は中古において一例のみの報告しかないが、他者へのあつらえを表わす例も見られるようになる。

花といはば、かくこそにほはまほしけれな　（源氏物語若菜上）

従っていまの更衣の歌の、「いかまほしきは命なりけり」において

も、「いかまほしき」を言語主体の希望と他者へのあつらえとの両様の可能性において捉え、また、その場合の主体と他者を、それぞれにおいて更衣と「命」との両様に設定し、さらに前章において見た「命生く」特に「命を生く」における、無意志的な自動性を基にした受身や他動的な意味合いへの揺れ、また、「命生く」を「生く」の強調表現と見た場合と、「を」の機能を動作を行う時間や場所を示すものと解した場合の「命を生く」の理解とを考慮して（今昔物語集以前の作品に、「命を生く」の例は拾い出せておらず、また、この更衣の歌にも「を」は現われていないが、詠歌した状況が更衣の瀕死の状態であることを考慮して、「命を生く」の形を想定するのである）、更衣の歌における「命生く」の意味構造のありようを想定すると、次の八通りが組み合わせとして可能となる。

①命ガ自ラ生カ（自動）マホシ（ト思ウ）　〔希望〕
②命ガ更衣ニ生カ（自動）マホシ（ク思ウ）　〔希求〕
③更衣ガ自ラ生カ（自動）マホシ（ト思ウ）　〔希望〕
④更衣ガ命ニ生カ（自動）マホシ（ク思ウ）　〔希求〕
⑤命ガ更衣ヲ生カ（他動）マホシ（ト思ウ）　〔希望〕
⑥更衣ガ命ヲ生カ（他動）マホシ（ト思ウ）　〔希望〕
⑦更衣ガ（命）生カ（自動）マホシ（ト思ウ）　〔希望〕
⑧更衣ガ天寿ヲ生カ（自動）マホシ（ト思ウ）　〔希望〕

これらの内、①は、「生かまほしきは命なりけり」といった言い方からすると自然な構造であると思われるが、万葉集以来の「命」の扱われ方からすると、「命」は神の支配するものではありえても、[10]「命」

自身が己れの意志や希望を作動させたり表出したりするようなことはなかったようなので、あえて「命」をそのように扱ったと解釈するなら別ではあるが、今の場合適当でない。同じ理由で、「命」が希望や希求の主体となる②⑤も妥当でない。また③の構造も、「命」が関与しないので却下される。従って残りの④⑥⑦⑧が妥当性を持つかと思われるが、これらの内、⑧は、更衣の歌の「命生く」を「命を生く」と「を」の入ったものに想定し、かつその「を」を動作を行う時間や場所を示すものと解釈した場合に成り立ちうるものであるから、その妥当性は他に較べて最も低いかと思われる。⑥も「を」の入った「命を生く」を想定すべき点では同様なので、これも弱点があるだろう。また⑦は、「命生く」を「生く」の強調的なものとみて、「命」を文飾的な語と見る点にためらいが残る。すると④が最も妥当かとも思われるが、この場合も、「まほし」を他者へのあつらえに用いた例が同じ源氏物語にあるとはいうものの、用例の少ない点が気にかかる。

こうして、桐壺更衣の歌の下句の解釈も、「命生く」「命を生く」という言い方一般が複雑な意味的様相を見せ、また「まほし」の用法の問題も関わるために、ある程度以上は鮮明にしがたい。しかし現段階において意味構造のありようとして可能性をもちえた④⑥⑦⑧においては、いずれも桐壺更衣自身が、己れの思いのままにならない「命」に対して生きのびてほしいと希求したり、あるいは生かしたいと希望し、また自身、生きたいと希望したりしているもので、桐壺帝との今生の別れに際しての、更衣の、生を望む意志は明瞭に示されているといえよう。

ともあれ、「命生く」ということば一つに限っても、いまだ不明のまま残されていることは多い。古典の解釈にも語義の理解にも、今後とも新たなアプローチが望まれる。

注

(1) 小稿で引用した文学作品の本文は以下による。また、調査した文献の範囲もほぼ同じい。古事記、古代歌謡集（皇太神宮年中行事）、竹取物語、伊勢物語、大和物語、平中物語、土佐日記、蜻蛉日記、和泉式部日記、紫式部日記、更級日記、枕草子、落窪物語、夜の寝覚、浜松中納言物語、狭衣物語、大鏡、今昔物語集、宇治拾遺物語、平家物語、以上は日本古典文学大系。万葉集は日本古典文学全集。古今和歌集、徒然草は新日本古典文学全集。後撰和歌集総索引。宇津保物語本文と索引。源氏物語大成。三宝絵詞、十訓抄、唐物語は古典文庫。能因本枕草子は笠間影印叢刊9。古本説話集は岩波文庫。多武峯少将物語は群書類従。校本讃岐典侍日記。今鏡校本及び総索引。新編国歌大観。文禄二年耶蘇会板伊曽保物語（京大国文研究室編）。点本は、大坪併治『改訂訓点語の研究』下の紹介。

(2) 三宝絵詞に見える「命ヲ軽シ」（上巻）「命ヲ不惜サリシ」（上巻）などの「軽シ」「惜」は動詞であろう。

(3) 桜井光昭「生クの活用について」『国語学』一一〇・昭和五二年九月、同「古代語の再帰的他動詞」『学術研究26国語・国文学編』昭和五二年。

(4) 広井玲子「宇津保物語に於ける客語表示の『を』について」『日本文学』（東京女子大）九、昭和三二年一〇月。

(5) 小山敦子「頻度から見た目的格表示の『を』の機能と表現価値」『国語学』三三、昭和三三年六月。

(6) 以下に見るごとく、この「生く（四段）」「立つ（四段）」「絶ゆ」「付く（四段）」などの自動詞における他動の様相は、これらの動詞が一方に「生く（下二段）」「立つ（下二段）」「断つ」「付く（下二段）」などの

他動詞と対応する点で、自・他同形同活用の「吹く」「笑ふ」「増す」の場合とは区別される。

(7) 「を」による強調の性質は、間投助詞「を」の成立に、感動詞「を」や応答詞「を」の存在が関わっていると推量されもすることから（宮地敦子「『を』の研究」『国文学』四ノ九、昭和三四年七月増刊号）、「この間投は、聞き手（呼びかけの相手）の注意を喚起する側のものではなく、話し手が話の内容たる行為の対象へ自ら深く心を傾ける表現であ」（林　大「を」『万葉集大成巻六言語篇』一五五頁）るとみておくのが妥当かと思われる。

(8) 鴻巣隼雄「解釈の一側面から見た万葉集の言語構造—心、身、命に就て—」『国語と国文学』二三ノ一、に既にこの点についての指摘がある。氏は「命」の背後にそれを支配する神の存在を主張する。

(9) 森野宗明「『まほし』の研究」『国文学』四ノ二、昭和三四年一月。

(10) 注(8)に同じ。